伊藤和

伊藤　和（一九〇三～一九六五）　千葉県匝瑳郡栄村の自作兼小作の農家に生まれ、匝瑳中学を中退して家業に従事。民衆詩派の影響下に詩作をはじめて『詩神』『耕人』『牧人』等及び県下の詩誌にも発表。一九二二年日本農民組合千葉県連、労働農民党千葉県支部に出入りし、県下の小作争議の応援に駈け廻ってしばしば検挙され、その間にしだいにアナキズム的傾向を深めたという。一九三〇年に草野心平の『学校』に作品を書き、同年ガリ版詩誌『馬』を出し、同人の田村栄と不敬罪、治安維持法違反で起訴、これが「馬事件」である。千葉監獄に未決一年の後の判決は懲役二年（猶予四年、入営中の田村は衛戍監獄二年）。その後上京して解放文化連盟に加わり、関東消費組合に勤務したが、無政府共産党事件、農村青年壮事件のためともに永く収監された。戦時中は銚子の造船会社に徴用、反戦的言動ありとして又も長期間留置された。アナキスト農村詩人として代表的存在であった。戦前『泥』（発禁）、戦後『伊藤和詩集』がある。

馬

歯はむきだされて白い
馬が空をむいて笑う

晴れた太陽におろかなこころではない！

馬は
荷を重いとはいわない
ヒヅメが鳴る
いくたびか往復する

おお途上に
大円の春のようにふくらんだ尻を向け

ひった糞は
太陽に照らされてかわき
ひろって行って
畑に入れよう。

一枚の着物

一枚の着物がすっかりとろけるまでには一年や二年ではない五年も
六年も着古し
やがてボロボロになってしまうと
鋏ではさんで子供のおしめにしたり雑巾にしたりする。

稲を刈る

腰までもずぶ濡れになって稲を刈る
女達は浅い田の方にいって刈る

昼頃の陽が
青空のまんなかに暖く照って
さとから鶏の声がきこえてくる
まもなく一反田は刈り終った

畦に上げて水のしたたる稲束を拝み立てる。

休日に

指に唾液をつけて顔面をもみ
おれはビンボウ髯を剃っていた

晴れると思っていた空の晴れない重圧をカミソリで切り破りたいと
　思ったり
空を云々するのは九鱈ないことだ
おれにはやらなければならない仕事が溜っている
髯を剃り終る
これから菜っぱと大根を抜いてきて荷造りしよう
俺の食うものを
友にも送れ！

コップ酒屋にいる男の群

町に行きコップ酒屋のノレンをくぐる
安い酒を一杯　注文する
土間をあらいざらい電灯が照らしている
しなびた瓜漬を嚙んでは牛のように舌を出し醤油のジャミた唇を
　舐め
百姓の仲間がいる　土方の仲間がいる　馬車挽の仲間がいる
おいらはみんな安い酒一杯二杯では酔わない唇をなめずる
なにしろ腹の虫がおさまらない
モウ一杯から　二杯となり五杯六杯とかさね酔ってくる
コップ酒屋にいる男の群！
おいらをヤクザ者と告げるお定まりのりんしょく共はここにはい
　ない
あいつ等はたぶん貯金をする話をし政府をほめながらあいつ等の

家にいる
何も持たないヤクザ者には困るとあいつ等が云う、そしておいらは
　コップ酒屋の腰掛にいる

そうだ、ここにおいらが酔っている
馬のように達者で、いくらでも呑みたい唇を舐めずり
空になるコップを冷笑し
また腕と腕が唸りミケンから血を流すそんな喧嘩もやり
おいらの眼はあいつらが震えるほどすわっている
全く それならば何が喧嘩をさせるのか、なんて理屈はヤボなことだ
喧嘩でもなんでもやるときはやる
胸がむかつく　コップ酒
コップ酒屋に来て見て驚く奴には毒だ
おいらが酔っている
で、結局　血を拭ってまた呑み直しおいらは大いに笑う。

高神村事件のときの詩

野原の芒のように騒ぐあいつ等はゲートル巻きサーベルをがちゃつかせた
野菊がいちめんに咲いたそんなところにさえ卓上電話が置かれ
受話器を通して××に犯人は間断なく報告された
報告する蒼白な顔達あいつ等の卑賤な口髯は軽蔑されていい
子供達は叩きこわされた役場や駐在所や山口藤兵衛の家を見に行き
万才を叫んだ
万才をあいつ等はサーベルをがちゃつかせ追い散らすのである
あいつ等がおいらのおとっさんや兄さんを縛った
そしてまた子供達は憎しみ見る

それにしてもまた子供達の向うをあいつ等のトラックが走っている

あとからあとから　たくさん縛られてゆく者の目がギロギロ光る
おとっさん！　兄さん！
呼びかけは泣声になる　泣け！
部落の男はみんな犯人である
さあ　みんな犯人だ縛ってゆけ！

後に学校の或るチョビ髯が子供達にむかって口走り言う
　諸君の父兄があんな騒擾事件を起したことはまったく憂慮にたえないのです、全く法律を無視したことです——軽くて罰金になるでしょう或は監獄に行かなければなりません、と
そいつのベラ言は子供達を侮辱する
で、またチョビ髯は口走り憂慮にたえないのですと薬をきかせる
よし、子供は反対につぶらかな眸をもって見る
チョビ髯がいう法律を無視したことですは奴隷の雑言である

忍耐をずうっと土の底で嚙み統け、汚れていない血脈！　それを知
　っているか
今日あった事件の断乎たる精神！
子供達は感受性の強い眸をかがやかし見る、そして
叩きこわされた役場や駐在所や山口藤兵衛の家を見にゆき万才を叫
　んだ
だから、それらを根絶やしにせんとする教育が百パーセント強かろ
　うか？
違う、子供達は断乎たる精神を理解する

そこで部落の男はみんな犯人だ！
明日も明後日もあいつ等野原の芒のように騒ぎ検挙の網を引っぱり
　廻せ
受話器を通して××に犯人は間断なく報告される
それがあいつ等の寝ざめに心地よさを思わせ支配の手が癒る

ふたたびぶり返し来るあいつ等の手か
われわれはその手から断じて逃走しない　そいつらに逆流する　逆
　流する
おお、われわれは幾度も信ずることについて行う！

仕事の前

集まった
朝鮮人達五十人とその外は俺たち百姓の仲間
夜明け前の厳寒に生松葉を焚いて暖を取る
脂臭い煙り
親分と呼ぶ奴はまだ来ていない
互に家族的な話から変じて日給についての不平が出る
朝鮮人達じつに栄養不良であった
菜っぱや大根を作る俺たちにしても
食わなければ萎れた緑のように腰がふらふらであった
と、云って一人前の仕事はちゃんとやるのだ
親分と呼ぶ奴そいつは洋服を着てやがる
そいつはいつでも俺たちを怒鳴ろうとねらってやがる

砿山から出てきた一人の仲間はあんな奴といった
あんな奴樽詰にするのは訳ないのだ
でまだこの干潟八万石排水路の工事はまっくら闇
燃えろ　燃えろ生松葉　燃えろ！
百姓のおれたちはこの排水路が誰の利益であるのかみんな知り
　きって
うんと耐えているその気持が氷った泥のように落付いている

高根倉之助

老ぼれてしまい、
叔父は死んだ。

生きている間いつも叔父はいっていた、
なんでも木っ葉みじんにやらかすことだ。

生きている間、老いぼれるまで、みじめで不幸のどんづまりを叔父は歩いた。
否、みじめで不幸のどんづまりはおれらのことだ。
そうしていま、死ぬことや悲しいことは何んでもなく思う。

叔父は老いぼれ葱の枯葉のような野良股引をはいて半日まえまで働

いた。
そうしてどろんと窪んだ目が見えなくなり、
手がだるいだるいと口走って土間にうっ伏し、
部屋につれてゆかれると間もなく息が絶えた。
そして屍はしずかである。
集まった近隣の者達はいっぱい土間と座敷にいた。

叔父高根倉之助。
その屍は静かである。
そしていつもいっていた。
なんでも木っ葉みじんにやらかすことだと。
その言葉はおれらの耳をうつ。
(老いぼれて息の絶えるまで労働し、それがみんなを真面目にさせる唯一のものではない。屈辱の中から息絶えるまで起ち上らんとする反抗の精神、そいつがみんなを元気づける)

そうしてそれは理想をふみつぶされた人間にとってびっくりする言葉だ。
そうしてそれはふみつぶす奴等にとって憎むべき言葉だ。

叔父は老いぼれ焦燥と飢餓を忍耐して死んだ。
明日は
叔父の葬いだ。
カラリと晴れた天気であれ。

米を売る話

おれらは売らねばならない。
何よりも辛苦たれてとった米。この一粒すら粗末にせず、拾いあつめて俵に入れて検査を受け、等級のレッテルを付けて、これで市場に出せる。
青藁の俵やレッテルを付けて、商品となる米を積み重ね、辛苦たれた俺らのそれが喜びであろうか。
常に警戒して、喜びや落付きのない日々を、
辛苦たれて俺らは自活のために労働し、取った米にレッテルを付けられ、めくらめっぽうに売る。
即ち市場であの手先どものソロバンにはじかれ、売渡す時、明日から焦燥するおれらではないか。

おれは利害について反省する。
現金を握り、計算し、そしていつもいつも現金は足りない。
米が高値となるのはあいつらのカムフラージ、そしてあいつらはうんと儲ける。
米があいつらの手に渡り、受取る現金になってどんなに羽振のいい時があろうか。
米を売るおれらの位置と同じく労働者諸君の苦痛はどうか？　俺らの手からすぐに労働者諸君に米を送るそれは正しい制度、しかし理想は行わないで俺らは売る。
おれらはめくらめっぽうに売る。こいつはずっと長い間の抱負を資本主義が奪ったのだ。
そうだ。俺らは農民として米一粒も持たず
納税。小作料。借金利子。そいつにおれらの貧困を手渡し、あらいざらいまた始める。

おれらは不平や泣ごとはたれるな。
めくらめっぽうは時に一人で木っ葉ミジンのことをやらかす。しかしそいつはまだ自覚なき興奮に過ぎないぞ。
日本の津々浦々この仲間は休みなく米をとる。
よし、おれらは米をとり経済制度の不平等をなくならせよ。
経済制度の不平等をカムフラージする金鎖や代議士共をなくならせよ。
ずっと長い間の抱負をおれらの手で行うことを約束しろ！
そして労働者諸君。
君等の位置と同じくおれらの位置があるこの事は一緒だ。
ずっと長い間の抱負を労働者諸君とおれらは一緒だ。

すいか

あせがながれる
かんかんてる

ガキらは　どんなに　たべたいであろう
しるのしたたる　まっかなスイカにむしゃぶりついて
はらをてんてんたたくまで

はたけのなかに　おおきくそだち
あっちに　ごろり
こっちに　ごろり
そのうえに　つると　はながかむさり
はなもたくさんついている

そして　かんかんてりますから
スイカはあかくいろづいたろう
ひとつ　ひとつ　ゆびでつついて
はやくまっかにならないか
ああ　おおきくなった　はつなりとにばんなり
おおきい　おおきい　おつきさまのようだという
ガキらは　よる　そのゆめをみるだろう

そして
はたけのなかに　はなとはなをむすばせながら
おおきい　はつなりとにばんなり
おららとみんなと　わけてたべたい

ガキらは

どこのガキらも　おなじことです

けれど　かってにたべてはならないど
かってにたべてしまってどうするか
おとなは　ガキらを　しからねばならない

ああ　おとなは　やっぱりかなしいだろう
おおきい　はつなりとにばんなり
くるまにつんで　とおくのまちへ
あせをながしてうりにゆく。

部落二百人

七ヵ月も降らない雨。
俺らは雨を待ちあぐみ呆然たる日を過した。
いまや秋になって刈る稲はない。凡て失なわれ。俺らの前に荒れはてた秋草の穂だけが風になびき。
今となっては雨は降りいでて止む日はなく。明日も降るだろう。
俺らは降り止まない雨に、腐るキノコのように沈み。愚痴をくり返えすではない。
お天気や雨は底知れない天の業。しかし米を穫る苦心がアア旱害に襲われてあらいざらい駄目になった。
俺らの台所に、いま食べる米が欠乏し。
それを如何にするか！　みんなみんな。ぐずついちゃいられないの

だ。
ああ、ああ、メシを食う口が部落二百人。

こんな時にみんな揃って哀願するか。ジトジト降る雨の雫の間を吸く風は陰気だ。そして頭を揃えてどうぞお助けをと云って見ろ。奴らはおいでなさいと待っている。払下米は市場価格を打撃してはならない。そして石何円が相当であるかと　奴らは算当づく。よし俺らに金はない。無ければ奴らははねつける。そうだ頭を揃えて腹ペコペコさせて引き下るなら哀願するな！

俺らは、みんなみんな。ぐずついちゃいられないのだ。メシを食う口が部落二百人。
おやじよ、旱害で米が穫れないその事ばかり考えて。「モウモウ百姓は立つ瀬がない」と思うのか？　そいつは一寸意義がちがう。
俺らは、ふだん米をとる。だがみんなみんな売らねばならず。あげ

くに米がない。こいつは旱害と違いはしねえ。
おやじよ。俺らが立つ瀬がないっていまに始まったことじゃねえぞ。

俺らが政府から米を買う。そんならあいつらはみんな商売人だ。
俺らはヤケ糞で云うんじゃねえ。
やりきれない、やりきれない、って声だけ空虚にひびく。そいつはジトジト降る雨の音と同じだ。
俺らは、ふだん米を穫る。

そうだ、そいつは笑って暮したい俺らの辛苦だ。世界津々浦々おなじに持つ立派な抱負だ。
おやじよ。そんならみんな商売人をなくさせろ！　あの辛苦たれて穫った俺らの。今あらいざらい困りきってる。まず俺らは米を奴らの倉庫から持って来て食え！

冬籠日記

錆びたバリカンであった。
隣りの大将と散髪をやり。

毛を掃き、
冬晴の樹の影が太く。
たくさん雀のチクンチクン鳴く声と、
来ていた隣りのちっちゃい餓鬼の歌。
歌が終るとウンコだと云う。
庭のまん中にこってりやって、俺の女房が尻をぬぐってやる。
雀と餓鬼とこいつらはのんびりしているぞ。
女房がお茶を持って来る。
「サア　サア　芋の熱いやつおあがんなさい」

お茶だと呼べば集ってくる近隣の者達。
隣りの大将は風邪気だと云ってネンネコ着、まるい頭に黒い木綿の
襟巻をかむってる。
向う隣りのおやじ。前の家の大将。
暫く酒も呑めねえってな訳の共通した話や、
寒さが身に泌みてやりきれないって云うモウロク話や、
そいつは笑って芋を食ってるお茶のみ話。

だが、しかし、
おやじ達よ、ここに並んでお茶をのみ至って理窟なくいる　ただそ
の顔がいつもカミソリを当てないから荒い髯。着ているドテラや
盲目縞のトンビ、こいつは鈍重に見えて物堅く腹の中は今日の事
をこまかく考えていた。

それは元来、土百姓って、とかく何も知らずケッに泥をくっつけていれば役目が済むなんて時代は勿論そのまま苦労だって鞭でひっぱたかれる牛の啼声みたいなものに違いないだろうが、何もかも苦労の劫を経て。いまめざめる者が殖え「能力に応じて生産し自由に消費する」そうあるべき事が正しい。そしてそれが今日の問題であり。

おやじ達よ。
まず今までだってお互扶け合う部落の習慣を引きしめ、若い者と一緒で何でも研究するし、
ますます　めざめる者が殖え。
いまや引っこみ思案や他力主義は排され。理想は強く実行すべしって訳だ。